

あつた。

(B) 林地の分では昭26.6処理の分では50%区が86%の萌芽割合を示して最も良好であつた。これらは鬱閉度だけでなく地中水分との関係が直接なようである。即ち乾燥地では或程度の鬱閉が必要であり多濕地では皆伐を可とする。

(2) 母樹についての試験

生長の良好なもの程萌芽率がや、良好である。樹幹については本試験の範囲では差違はない。

(3) 残根及び発生した根芽についての試験

旧株に近いもの及び残根頭直径の大なるもの程萌芽率、根芽発生本数、根芽の生育天頂(成績を示している)がこの点については繁殖用クスの有効的利用との問題に於て研討の余地が多い。

今迄の試験の結果では旧母樹の跡に確実に次代の成立を期待出来ないので実生又は挿木養成苗木の補植を必要とする。

今後は残根の栄養関係、植物ホルモンによる根芽の発生促進等の内部的な方面についての研究を併せ行う予定である。

松の品種について (第三報)

品種を異にせる松林地土壌の理化学的差異について (予報)

林業試験場熊本支場

石崎厚美

下野圓正

本報告は九州に於ける品種を異にせる次に松江の松茂道松野庄松小林松日向赤松霧島松の各松林地の土壌が、如何なる条件の下におかれているか、その理化学的実験結果について検討したものである。

調査方法

各調査地に於て土壌断面の状態を調査し、表土層(比長0~5cm)中層(30~35cm)下層(60~65cm)の各層より、円筒及び布枝によつて資料を採取し、円筒資料は理学的実験、布枝資料は化学的実験に供した。

調査結果及考察

調査地土壌断面の成層状態は第一図の通りで、之は円筒号が必ずしも同じ性質を示すものではなく、筒筒質鉄質各土壌の模型図である。

機械的組成はピペット法によつて行いその結果は第一表の通りで、土性は国際土壌学会

法による

理学的実験結果は第一表、第三表に示す通り、紅の松、次上松最も甚に堆積し、茂道松、霧佐松、小林松、日向赤松、霧島松の順に疎な堆積状態を示しており、水分関係については紅の松、次上松最も少く、霧島松、日向赤松、小林松、霧佐松、茂道松の順に多くなっており、霧島松、日向赤松が疎な堆積状態を示しており乍ら含水量少いのは、堆積状態疎であり過ぎること、菌糸粉を認めることに原因していると認められ、上中下層及び小林松、霧佐松、茂道松と比較した時つなづける。更に機械的組成との関係について見る時、粘質土壌上層水分多く砂質土壌少く、霧佐松に於て稍砂質土壌であるが、火山灰土壌である爲に水分量稍多い。

次に採取時の上層実質空気水分の組成割合についても第四表の様な堆積状態と同様傾向を示している。

土壌反応及置換性石灰の実験結果は第五表に示す通りである。之はKCl浸出液について実験したものでpH置換性酸度及層稍強く下層に行くに従つて弱弱くなつており、置換性石灰も全体的に非常に少く、詳細に検討する時、次上松、紅の松、霧島松は酸度弱く置換性石灰少く、日向赤松は酸度稍強く置換性石灰も稍多く、茂道松、酸度強く置換性石灰少く小林松はその中間にあり霧佐松は逆に酸度弱く置換性石灰も稍多い。従つて赤松の霧島松日向赤松に於ては酸度弱き時は置換性石灰少く強き時は多く、黒松に近い霧佐松小林松、茂道松についてはその逆の関係が認められた。然し之を置換性石灰の多少は大所約に少くもの、中の多少を意味するもので、明瞭なことは言えない。

摘 要

- 1 次上松、紅の松、茂道松、霧佐松、小林松、日向赤松、霧島松の七ヶ所に於て、土壌形態を調査し肥化学的性質の差異について検討した。
- 2 土壌形態は次上松、紅の松の砂地土壌、霧佐松の溶岩型火山灰土壌、茂道、小林松の弱粘土壌、日向赤松、霧島松の免注土壌で結構相当混和しA層が厚い土壌であつた。
- 3 土壌の堆積状態は次上松、紅の松の砂地土壌最も甚に堆積し、茂道松、霧佐松、小林松、日向赤松、霧島松と順次疎な堆積状態を示している。
- 4 土壌の水分状態については次上松、紅の松の砂地土壌最も少く、堆積状態と稍関連しており、更に菌糸粉を認め稍砂質な霧島松、日向赤松少く、稍粘質な小林松、茂道松及び火山灰土壌の霧佐松が多い。
- 5 土壌反応は各所夫大差なく置換性石灰も非常に少く、更に詳細に検討する時、赤松及霧島松は酸度弱き時は置換性石灰少く、強き時は多く、次上松、紅の松、霧島松は前者に属す。
- 霧佐松に近い霧佐松、小林松、茂道松については赤松及霧島松の割合と逆な関係が認められた。
- 6 全体を通じて土壌断面稍粘質を多く混和し稍疎な堆積状態、互程少くない水分含量置換性石灰の少くことと認められ、松林適地判定の一つの資料と考えられる。